



# ジェームス・クリュス「101日物語」における「語り」の魅力と島の象徴性

著者	漆谷 球美子
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10236/00028206">http://hdl.handle.net/10236/00028206</a>

氏名	漆谷 球美子
学位の専攻分野の名称	博士（文学）
学位記番号	甲文第188号（文部科学省への報告番号甲第681号）
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
学位授与年月日	2019年2月28日
学位論文題目	ジェームス・クリュス「101日物語」における「語り」の魅力と島の象徴性
論文審査委員	（主査）教授 木野 光 司 （副査）教授 アンドレアス ルスターホルツ 倉賀野 安 英（関西学院大学名誉教授）

## 論文内容の要旨

本論文は20世紀を代表する児童文学作家ジェームス・クリュス（James Krüss, 1926-1997）が40年の歳月をかけて完成した「101日物語」（*Die Geschichten der 101 Tage*）を考察の対象とするものである。この物語はクリュスの作家活動の全期間に亘る17作品を一つのストーリーに纏め上げたものである。

本論文は、この長大なシリーズの作品群に共通する二つの重要な特徴を明らかにすることに主な目標をおいている。それは、クリュス作品で頻出する口頭による「語り」の意義であり、ドイツ文学には類例がない「島」を舞台にした作品群に賦与される意義である。

本論文の構成は2部からなっている。第1部では「101日物語」の詩学的特徴に焦点を当てている。第1章では独立した作品を「101日物語」に纏め上げるための「構想」、「枠物語」等の工夫を明らかにし、第2章では17作品を配列する上で作家がおこなった複雑な「円環構造」構成の意図とその構造が生み出す効果について明らかにしている。それらを踏まえて第3章においては、クリュス作品の大きな特徴となっている口頭による「語り」、語り手と聞き手たちが様々な状況でおこなう物語が持つ力、生活の中で物語を語ることももたらす喜びの重要性を様々な作品の例を挙げて論じている。

第2部ではクリュスの物語の舞台に着眼し、それを4種のタイプに分類して考察をおこなっている。第1章においては、作家の生まれ故郷ヘルゴラント島を舞台とする作品の考察によって、この島が現代社会の悪弊から免れた自然に包まれた牧歌的世界と美化されていることを明らかにしている。第2章では、第1章の世界に対置される世界として、クリュスの長編作品に現れる「都市」、そこを舞台に繰り広げられる「資本主義社会」の悪魔性を明らかにしている。第3章では、作家が晩年を過ごしたグランカナリア島およびカナリア諸島を想起させる想像上の島を舞台にした作品群を取り上げ、これらの物語においてクリュスが理想とする世界、現実には存在しがたいクリュスの「ユートピア像」が描かれていることを明らかにしている。そして最終第4章では、クリュスの原体験の舞台であり、また終生の理想でもあった「島での牧歌的生活」の中で人々が「打ち解けて語り合う」世界を描く「ロプスター岩礁」に描かれた空間が、この作家が最も重要視したものが揃った世界であることを明らかにしている。

本論文は、これらの考察の結論として、クリュス作品が「口承性」の最大限の利用という独創性、また「島」や「海洋」を舞台にした世界を描くという独創性によって、ドイツ文学の中できわめて珍しい文学世界を形成していることを確認している。

## 論文審査結果の要旨

本論文は20世紀の児童文学作家ジェームス・クリュスのライフワークとも言える「101日物語」を考察したものである。クリュスは、20世紀ドイツにおける児童文学作家としては、エーリヒ・ケストナー、ミヒャエル・エンデに次ぐ位置を占める作家とされているが、前二者に比して日本での知名度は低い。その主な理由は、クリュス作品の舞台の特殊性（牧歌的な島の生活）とその語り口の単純さにあると考えられる。ドイツ本国では現在もある程度の知名度を保ってはいるが、日本のドイツ文学者でクリュスを研究対象とする人はほとんどいない。

漆谷球美子氏は2011年の修士論文執筆の際に先行研究の少ないこの作家と取り組むことにし、入手しうる限りのクリュスの作品の収集・検討から始め、日独の関連文献を渉猟し、また多くの作品の舞台となる作家の故郷の現地調査をおこなうなど、精力的にこの作家の作品と取り組んだ成果を本論文に纏めている。

漆谷氏の本論文での中心的なテーゼは二つある。一つは、「単純な語り口」として文学的評価の低いクリュスの特徴を、この作家の創作の重要な特徴と評価できるとするテーゼである。本論文第1部における考察によって、この作家の活動の原点と理想が、口頭による「語り」、あるいは語りに耳を傾ける行為そのものにあることを明らかにし、クリュス作品を子供向けの文学と軽視する論拠とされるその「素朴さ」(Naivität)こそが、クリュス文学の重要な特質であることを論証している。もう一つのテーゼは、ドイツ文学の中でクリュスが特異な位置を占めているというテーゼである。ドイツはその北部の一部においてのみ海と接しているという地理的事情から、ドイツ文学にはほとんど海洋文学が生まれなかった。そこでは、「島」は日常性から切り離された異世界、冒険の果てに辿り着く場所というトポスと理解されることが普通であった。漆谷氏は、クリュスの多くの作品の舞台となる海と島の考察から、この作家の場合には、「島」の象徴性がドイツ文学一般のそれとは正反対の特徴を持つことを明らかにした。第2部において、クリュスが北海沖合のヘルゴラント島生まれの作家として、この島をドイツ本土とは異なる牧歌的生活が生き続ける幸福な世界と描いたこと、他方でドイツ本土の大都市ハンブルクを舞台とする作品においては、20世紀後半の西ドイツが抱えていた様々な問題、貧富の格差、富による人間の支配、資本主義が内包する矛盾などを「悪魔との契約」というモチーフを用いて批判的に描いていることを明らかにした。さらに、クリュス自身が成功を収めていたドイツを離れ、晩年をカナリア諸島で過ごしたこと、その島々を舞台に描いた作品が、この作家の理想社会、ユートピアとなっていることを踏まえて、漆谷氏は、「島の生活」が特異な冒険の場ではなく、この作家の生活および精神生活にとって大切な場であったことを説得的に論じている。

ドイツ語圏にはクリュス研究者はこの作家の知人を中心に数名おり、伝記や博士論文も出版されているが、上述のように、日本では彼の作品の翻訳者はいても、クリュス研究をおこなっている人がいない状況である。その意味で、本論文は、日本においてジェームス・クリュス文学と最初に取り組んだ研究論文であり、取り上げている対象の広さからも包括的学術論文と呼びうるものに仕上がっている。

本論文についての口頭試問は2019年2月12日におこなわれ、漆谷氏は審査員の論文内容に関する質問に的確に答えた。ただ、クリュスの同時代の作家との比較考察や、作品と同時代の社会状況との関連に関する質問に関しては、不十分なところが散見された。論文本体においても、作家研究に終始している傾向が見られた。しかし、これらの点は、漆谷氏が今後の研究において補うべき課題を示すものであり、本論文の基本的価値を損なうものではない。

以上、審査の結果、漆谷球美子氏の論文は博士（文学）の学位授与に十分価するものと評価する次第である。